

## コンゴ伝道に見る異文化接触 (44)

おやさと研究所准教授  
森 洋明 Yomei Mori

1997年6月5日、首都ブラザビル市内では、夜間外出令が発令された。市街地では、昼夜を問わず銃声や砲声が鳴り響いた。その原因は、コンゴで初めて行われた民主選挙（1992年）で選出されたパスカル・リスバ大統領側の兵士が、政権の座を奪われたサスー・ンゲソ前大統領の私邸を包囲し、武装解除を迫ったことによる。両者の対立は、武力衝突へと発展し、国は再び内戦状態へと突入した。約4ヶ月にわたる武力衝突で、市内に甚大な被害をもたらした。とりわけ、首都中心部が戦闘の舞台となっていたので、ホテルやスーパーマーケット、銀行など多くの建物が砲弾で破壊された。大通りには死体が散乱し、その中には学校の鞆を背負った子どもの姿もあった。市内の総合病院の遺体収容所は、運ばれてくる遺体であふれ、収容しきれない分は、廊下や外に放置されたままだった。あたりでは、強烈なおいを発していたようだ。



廃墟となった街の建物（上）  
砲弾を受けたカトリック教会（下）



フランスは激化する内戦を受けて、フランス人に対して国外退去を決定し、軍を投入した国外脱出作戦を実行した。ペリカン作戦と名付けられ、1,250人の兵士を投入し、6月8日から15日までの間に、1,500人のフランス人を含む6,000人の外国人を軍用機で脱出させた。外国人の国外脱出が完了するまでマヤマヤ国際空港は、フランス軍の監視下にお

かれていた。フランス国内では、武装したフランスの兵士が市内を移動する姿や砲撃を避け命からがら空港にたどり着いた人々の様子を、連日テレビで放映していた。

6月20日、フランスの部隊が空港から最終的に撤退すると、内戦はこの空港獲得を巡って激化した。各国の大使館が一時閉鎖を決定する中、街の中央にあるフランス大使館だけは、軍の特別部隊を配備して閉鎖しなかった。戦闘が激しくなる中、国連やアフリカ統一機構の提唱に基づいて、隣国のガボンが調停に乗り出し、一旦は停戦が合意された。しかし、現場では戦闘が続き、首都の建物は瓦礫と化していった。

この間、コンゴブラザビル教会とは連絡が取れない状態が続き、教会関係者の安否が心配された。8月になってようやく電話が繋がり、会長や信者たちの無事が確認された。この戦闘では、教会は直接的被害は免れたが、それでも2発の砲弾が教会敷地内に落ちたようだ。受話器の向こうで、ノソング会長は「教会を死守する覚悟だ」と伝えてきた。前年に修養科を終えた4人も、教会や布教所とそれぞれにとどまり続けることが伝えられた。

10月半ばになって、アンゴラ軍の加勢を受けたサスー・ン

ゲソ派が優勢に立ち、リスバ大統領は首都を追われ、南部の地元へ逃げた。しかし、その地元にも追っ手が迫ってきたので、最後は国外に逃亡し、内戦が収束した。首都ではサスー・ンゲソ氏が国内外に向けて勝利宣言を行い、暫定政権を樹立した。勝利側の軍の中にはアンゴラやチャドなどからの傭兵も多くいたようだが、外国人が住んでいた家屋は略奪の標的となり、それが彼らの戦利品であり報酬となった。

翌年の1998年1月には、「団結と国民和解のフォーラム」が開催され、暫定政権期間を3年とし、この間に大統領選挙を行うことが確認された。街の中心部におけるインフラの回復は進まない中でも、国が落ち着き始めたことにより、内戦勃発から停止されていたエアーフランス便が2月に再開され、フランス系のホテルでも再び営業を始めた。

同じく2月、ノソング氏はポワントノワールを経由して、パリに行った。4月におぢばへお礼参拝をしたい旨を伝えてきた。当初、彼の渡仏の目的はおぢばがえりかと思われたが、実際は、父親の体の不調を聞いたパリ在住の子どもたちが、パリでの精密検査を勧めたためだった。

精密検査の結果、肺癌と診断され、4月のおぢばがえりも果たせず、パリでの闘病生活が始まった。その4月には、おぢばから高井猶久世話人が彼を見舞いにパリに出向いた。ノソング氏は腫瘍の摘出手術を受けたが、病気はかなり進行していたようで、全部を取り除くことは不可能だと診断され、化学療法を長期にわたって受けることになった。それは、コンゴブラザビル教会にとっては、会長が長期にわたって不在となることを意味していた。実際、ノソング氏はその後祖国に戻るはことなく、2002年4月パリで出直している。

7月になって、内戦後の教会視察及び信者慰問のために、高橋利行ヨーロッパ・アフリカ課長が、「たすけあいネット」からの支援物資を携えてコンゴを訪問した。コンゴブラザビル教会では、会長が不在の中でも、若い人たちが中心となって活動が続けられていた。しかし、9月になって、またもや武力衝突が勃発する。

先の内戦で、リスバ氏を支持した前首相のコレラ氏の民兵グループが武装蜂起した。首都の南部からブラザビル市内に侵攻し、正規軍となったサスー派の軍と衝突した。そしてその衝突舞台は、コンゴブラザビル教会が建っているマケレケレやバコンゴ地区だった。教会関係者も周辺地域の住民と共に、戦闘を逃れて避難しなければならなかった。

この戦闘は、これまでの2回の武力衝突とは異なり、コンゴ政府の認識では「内戦」とは位置づけられていない。これはゲリラ化した反政府分子の武装蜂起で、「正規軍」が武力で制圧したことになっている。だが実際は、「ニンジャ」と称する反政府の武装集団と「コブラ」と称するサスー派部隊の武力衝突であり、戦闘用ヘリからの大規模な爆撃やロケット弾による砲撃で、1,500人から2,000人の犠牲者が出ている。コンゴブラザビル教会やポトポトジュエ布教所が、この武力衝突で、物質面において大きな被害に遭ったことを考えるなら、それはまさに「内戦」に他ならない。その中で、教会につながる人たちが避難生活を通して壮絶な体験をすることになる。